

7 アウトロー

ああ母さん 僕は父さんの跡を継いで農夫になんかなりたくない  
ぬかるんだ畑に腰を屈めて 鋤<sup>すき</sup>や鍬<sup>くわ</sup>や手鋤<sup>てすき</sup>を振るい  
妻や子や雌牛には切り詰めさせて どこかの貴族を肥え太らせ  
地代を払えず死なせるなんて真っ平だ 剣を振るって死んだほうがまし

母さん 僕はじっと暗い部屋に籠る牧師になんかなりたくない 5  
来る日も来る日も羊皮紙の上にペンを走らせて  
石造りの細長い窓からわずかに見える空を眺めて  
柳の小枝で編んだ籠の中の雲雀<sup>ひばり</sup>のように やつれて死ぬなんて真っ平だ

母さん 僕は長い毛皮の上着を着た商人になんかなりたくない 10  
足を痛めた馬たちに車を引かせて土埃が舞う騒がしい街を歩いては  
騎士や貴婦人に深々と頭を下げて へたくそな口上で物を売り  
嘘を並べて銀貨をため込み 気苦労に気苦労を重ねるなんて真っ平だ

母さん 僕はごろつき仲間と博打を打つ兵士になんかなりたくない 15  
城で退屈な日々をぼやきながら 戦<sup>いくさ</sup>に荒れ果てた土地を見渡す  
目の前には焼けて煙が立つ牛舎 悲鳴を上げる女たち 惨<sup>むご</sup>たらしい戦<sup>いくさ</sup>の光景  
血に汚れてしまったこの手を さらに血で染めるなんて真っ平だ

母さん もし僕に妻がいれば穏やかな心持ちでいられたろう 20  
炉端に座り 心ゆくまで笑い合い 語り合っていたらろう  
愛する妻のとなりに座って 子どもたちを膝の上に抱いていたらろう  
けれど死は横暴で月日の流れは容赦ない 僕は愛には縁がない

母さん 僕を産んだときのことをよく覚えているよね  
一晚中喘いでいた母さんのまわりには鹿たちがいた  
だから 僕があちらこちらを彷徨<sup>さまよ</sup>いたいと思うのは運命なんだ  
故郷<sup>ふるさと</sup>にも娘たちにも興味はない 欲しいのは美しい灰褐色の鹿だけだ

母さん 僕は碌でなしでも怠け者でも ましてや盗人<sup>ぬすっと</sup>でもない 25  
ただ神様の丘で 神様のもとに生きる物たちを頂くだけだ  
そこでは誰も鹿を売り買いしない 美しい鹿の皮だって神様からのお恵みだ  
腕に鷹を乗せた礼帯の騎士だって もの乞いのようなこの僕だって

母さん だから僕は遠く離れた荒野に行って鹿を狩る  
しかめっ面をした連中からも穏やかな顔した連中からも遠く離れて 30  
小川や羊齒しだの間を這って進み がれ場を飛んで下り  
岩山や岬から辺りを見渡し 夏のそよ風を胸いっぱい吸い込む

ああ ヒースの蜂蜜の微かな香り 丘に響く心地よい調べ  
からだの大きな雄鹿たちが草を喰はむのを 一日中間近で見張る  
ああ 大空に弧を描いて飛ぶ鷺の鳴き声に耳を傾けるなんて 35  
仔馬や牛の糞にまみれて生きるより ずっと素晴らしい人生だ

母さん もし僕が捕まって 屠ほふられた鹿みたいに吊るされたなら  
いつまでも僕をそのままにして 鴉の餌にさせたりしないでくれ  
優しい二人の兄弟に知らせて 僕を処刑台から連れ去ってくれ  
そして焦げ茶色の荒野に葬ってくれ 僕が愛したあの場所に 40

遠く離れた峡谷の 丘と小川の間で葬ってくれ  
雷鳥の囀りと雄鹿の鳴き声を聞いていたいから  
母さん もし僕が亡霊になったら 空を仰いで彷徨さまようだろう  
果てしなく長い夜の間ずっと 灰褐色の鹿が眠る暗い丘の中腹を

(宮原牧子訳)